

川端文学研究会

「盲目と少女」(掌の小説) 補遺

森 晴雄

かつて本誌の第六号(平成20・11)に「盲目と少女―自分の生活」を發表した。そのさい少女が盲目の田村を送って行く道について、「少女が盲目を送って行く道は私の家から高円寺の駅へ行く道である。」(「独影自命―作品自解」)と川端の説明があるので、どの程度事実と関わっているのが気になっていたが、適当な資料がなく誌することができなかった。具体的には次の記述である。

右側が煙草屋、車屋、はき物屋、柳行李屋、しる粉屋―左側が酒屋、たび屋、そば屋、すし屋、荒物屋、化粧品屋、齒科医院―聞かれるままにお加代が教へた停車場まで六七町の道に並んだ店々の順序を田村はすっかり覚え込んでしまった。

この他、作品に登場する店は果物屋、葬儀社、ごぶく屋、たんす屋、洋食屋である。

川端が東京府豊多摩郡杉並町馬橋二二六(家主、吉田守一)に住んだのは、昭和二年四月九日から十二月末までであり、執筆は翌年の二月、熱海の鳥尾別荘である。ほぼ正確な道筋を記憶している時期であろう。

高円寺の駅までの商店街が約六町(一町は約一〇九四)、自宅から商店街に出るまでがほぼ一町弱なので、川端の誌す「六七町」は正確な距離である。

店を知るには「東京府豊多摩郡杉並町全図」のような、町名と地番のみを記した地図では役に立たない。商店名が具体的に記載されていなければ意味がない。

今回、「杉並町勉強商工者案内地図」(原田弘氏蔵)を見る機会を持った。作品執筆から三年後の昭和六年二月の地図である。ちなみに、「勉強」とは商人が品物を安く売ることである。以下、地図を参考に商店名を推測しておく。

川端の住居から商店街に向い四辻の最初の右

側(作品では煙草屋、車屋)は「228」の番地だけが記され店名はない。すでに廃業したのか、あつても地図に載せるほどの店ではなく(煙草屋は小さく、車屋は正式の商売ではない?)記されていないのか。どちらにしても商店街に入る角には煙草屋が相応しいと考えたのではないか。

以下右側は「はき物屋」……福田屋履物店、「柳行李屋」……栄堂藤家具店、「しる粉屋」……喫茶ミツトミまたはカフェー、カルメンなどが当たらう。左側は

「酒屋」……川口屋酒店、「たび屋」……美濃屋足袋店、「すし屋」……松葉寿司

この三店は実際に酒屋、たび屋、すし屋が一面に並んでいるので、作品で三番目の「そば屋」は作者の創作(大衆的な食べ物として)、あるいはすぐ先の「福栄食堂」を意識してのことか。なお、商店街には、蕎麦屋は駅に近い方に「ひよし庵そば店」があるだけである。次の一面に「荒物屋」……まつや小間物店、「化粧品屋」……セイ堂薬局(または最初の一面にある昭和薬局)あるいは、小間物店と齒科医院の間が空白なので廃業か。「齒科医院」……田中齒科医院である。より正確なことは、昭和二年版を待たねばならない(存在するとしたら)が、ほぼ作者の述べるように、事実に近いものと考えられる。特に右に

比べて左側は地図に近似している。そのことは川端にとつて、左側が印象深かったからではないか。羽鳥徹哉が川端の盲目への関心に触れて、「川端康成と盲目の人」、『作家川端の展開』教育出版センター、平成5・3)

川端が盲目の人に関心を寄せた理由の一つには、祖父が盲目だったということがあると思う。また川端自身、右目はほとんど見えていなかったそうで、そういうことも無関係ではないと思う。

と誌しているように、右目が見えなかったことが関わっている。このことは川端自身も「故園」(『文芸』昭和18・5〜20・1)で次のように誌している。

……ていねいに診察してもらったが、やはり白内障はなかった。しかし、両方とも眼底結核をわずらったことがあると言はれた。右の眼は網膜の真中なので、視力がそこなはれてゐるのだった。

……中略……

中学の入学試験の体格検査で、私は右の眼がよく見えないのにおどろいたのだから、その前にわずらったのちがひなかった。

駅に向かうときと帰りは逆転するわけだが、自宅への帰宅は行きに比べて、急いで、あるいは裏

道を通ることが多かったのかもしれない。

なお、以上の商店が列挙されている直前に、次のような場面がある。

「果物屋の前だらう。」

「葬儀社の前へ来たかい。」

「ごふく屋はまだか。」

同じ道をたび重ねて歩くうちに、田村は戯れともなく真剣ともなく、よくそんなことを言ふやうになつた。

最初の果物屋は商店街に入つてすぐの言葉である。実際の地図には店名は記されていないので創作か、あるいは「228」「229」と書かれている空白の場所にその当時にはあったのか。最初の目印として、作品に親しみのある果物屋を書き込んだのではないか。葬儀社は「水口葬儀社」が二画面に存在する。歩き出してからそう時間が経っていない間である。ごふく屋は商店街に入つて三町半程行つてから「大黒屋呉服店」「近江屋呉服店」「武蔵屋呉服店」などがある。駅まで二町程である。駅が間近という思いが伝わる田村の言葉である。

*

本年六月に杉並区立郷土博物館(井の頭線、永福町下車)に、「上林晧展―闘病の作家その作品と生涯」を観に行つた時のことである。展覧会そ

のものは「写真展杉並の作家たち」とあるように、上林晧の作品の一節と写真を組み合わせたもので、懐かしさを感じながら見終わって、二階のちよつとした読書室・休憩所にいたときである。数十枚の大きな地図が立てかけてあった。杉並ならびに東京の地図である。その中の一枚が今回紹介した「杉並町勉強商工者案内地図」であった。なお、上林晧の代表作「白い屋形船」(『新潮』昭和38・8)はその幻想性で同時期に発表された川端の『片腕』(『新潮』昭和38・8〜39・1)に匹敵する短篇小説である。

旧天城トンネル

佐藤翔哉

暗いトンネルに入ると、冷たい雫がぼたぼた落ちてゐた。南伊豆への出口が前方に小さく明るんでゐた。

「伊豆の踊子」第一章末尾からの引用である。旧制高等学校の学生である「私」はこのトンネルを抜けたあと、六町といかないうちに先行していた踊子一行に追いついて、旅の道連れとなる。この作品は、孤児根性を抱えていた「私」が踊子蕪の子供のような純真さに触れ、蕪に「いい人はい

いね。」と肯定されることで、歪んだ心が浄化されていく話といえるだろう。南伊豆はそのための舞台として作品を効果的に彩っている。明るい南伊豆へと向かうためには、先に引用した旧天城トンネルを通過すること、これは作品内で大きな意味をもっている。作品を読んだときには、場面の転換する際にトンネルはいい装置だな、くらいにしか感じなかった。それが、実際にそのトンネルを通過してみて、文字を読むだけでは感じられなかった読みに至ることができた。

私はこの旧天城トンネルを、三度訪ねている。最初は、二〇〇八年九月に学内で知り合った友人とで、雨の中、水生地というバス停から湯ヶ野の福田家まで歩き通した。普段、トンネル内には電灯が点いているが、昔の雰囲気を味わうために北側の入口にある操作盤で電灯を消すことができた。しかし、私が訪れたときには探しても見つからなかった。あとから聞いた話では、操作盤が壊されるいたずらが相次ぎ、一般の人では手の届かない位置に操作盤をずらしたらしい。心が痛む。北側の入口の前に立つと、感慨深い思いに満たされた。そして実際にトンネルを通過してみる。ポツン、ポツン。雨滴が地面に落ちる音が響く。それ以外に音はない。視界もはるか前方に一点の出口の光りが見えるだけで、他には何も見えない。空

気はひんやりしている。トンネルの中央に近づくとつれ入口からの光りが届かなくなり、出口の光りはほんのり白く浮かんているように変化していった。暗いところにいると慣れてきて目が利くようになるというが、このときは慣れることなく、出口に近づくまでずっと上下左右に暗闇の世界が広がり続けていた。それがトンネルの中央に着いたころになると、身体が暗闇の空間をふわふわと浮いているような不思議な感覚に襲われた。突然だが、私は十歳のときに母を亡くしている。このとき、それ以来積み重なってきた悲しみが暗闇に溶け込んでいってしまいそうな気さえた。それと同時に私は、「伊豆の踊子」の「私」もこのトンネルを通ったときに、孤児根性から来る心の僻みが暗闇と一体化し、「私」の心から抜け出たのではないか、と思った。

二度目は、二〇〇九年十二月に、平山三男先生からお誘いを受けたときだ。平山先生が湯本館から伊豆の観光発展のためモニターとして十数名お連れしてほしいとの依頼を受け、私を招待してくださいだった。このときも操作盤は使えなくて、トンネル内には電灯が点いていた。昔の雰囲気は味わえなかったものの、ある発見があった。この日は前日までの天気予報が外れ、天候に恵まれた。以前訪れたときには雨で空が暗くあまりわから

なかったが、トンネルの北側と南側では明るさと気温が肌で実感できるほど違うのだ。明るさは北側であれば日光が山に遮られ影となるから暗くなるのはもつともで、気温もそれに従い低くなるのはこれまた当たり前なのだが、トンネル一つ抜けるとこれほどまで変わるのかと驚いた。暗く気温の低い北側から、明るく気温の高い南伊豆へと抜けていくこのトンネルは、「私」に焦点を当てたとき、彼が抱えていた孤児根性からくる歪んだ心の浄化の布石として捉えることができるのではないか。

三度目は二〇一〇年六月、教育実習を終えて少し息抜きに一人で訪れた。蛍観賞が目的だった。今年は何年より蛍が少ないと聞いた。しかし、自然の中で蛍を見ることが初めてだった私には多いも少ないも頓着しない。ただ目の前の美しさに魅入るばかりだった。翌日は夕方から大学の授業があるので早く帰らなければならなかった。それでも、一箇所だけ訪れておきたいところがあった。旧天城トンネルである。この日は、トンネルを往復することにした。南側に出るとやはり暑くて汗が滲む。もう一度トンネルを通過して北側に出ると汗が引いていくのがわかった。そのまま二時間ばかり森林を歩き、伊豆の空気を身体に染みこませて大学へ向かった。

今東光の遺品

高比良直美

今東光夫人、きよさんが平成二十年に八十六歳で亡くなられて九二年になる。今東光は、昭和五十二年に七十九歳で亡くなっていて、ご命日は同じ九月十九日である。きよさんがお元氣なときは、毎年九月十九日にはゆかりの人々が遠くからも集い、賑やかな宴会が開かれていた。寂聴さんも何度か見えていた。

きよさんは、亡くなられる前の三年余り、自宅を離れ、病院や老人介護施設で過ごされていた。それ以来、佐倉市下志津にある住まいは、近くに住むきよさんの兄の息子さん、つまり甥御さん夫婦の管理のもとにある。

プレハブ建築の平屋建て。玄関を入って左手は志津草庵と扁額の揚げられたプライベートスペースで、書斎、筆筒の間、寢室、風呂、トイレがある。玄関を入れて直ぐの玄関ロビーには硝子越しに作りつけの井戸と芝生の庭が見え、テーブルと椅子が置かれている。私が訪れ始めた平成八年にはその壁に「今東光大々勝」と、選挙のおり川端康成が書いた大きな書が、河内木綿で額装され

て掲げられていた。伊吹和子さんが「瞳の伝説」(平9・4 P H P 研究所) 執筆のために、きよ夫人に取材をしに訪れて間もなくの時だったので、ゆかりのものをと、配慮してあったのかもしれない。その後絹の布に包んで書庫にしまわれて、額に入った何かのポスターが代わりに掛けられていた。

右手は、広いリビングルームで、シャンデリアがあり、大きな洋画や、棟方志功の版画、東郷青児の絵、今東光の写真パネルなどなど、まるで美術館のように飾られていた。

リビングに続く和室との境の板の襖は壁にすべて引き込まれるようになっていて、いつも開け放たれていた。日常生活の居間になっていて、食事をしたりテレビを見たり、客と話をしたり、多くをそこで過ごしておられた。冬には火鉢が置かれ、火鉢には一年中炭火が入っていて、鉄瓶にお湯が湧いていた。その奥に続いて仏間があり、祭壇には花が絶えることなく飾られ、今家を訪れるとまずお線香を焚いてお参りするのが習わしになっていた。

今東光亡き後きよ夫人が独り住まいしながら、書斎もそのままの状態を保ち、書籍や写真、絵画などなど、散逸させることなく、守っておられた。

それらの品々が、岩手県二戸市に寄贈されることになったと聞いていたので、その後の様子をうかがうべく、お盆にお訪ねした。

昨年五月に二戸市浄法寺町に瀬戸内寂聴記念館がオープンしたが、そこに今東光の品々も展示されることになったのだという。浄法寺町は町村合併後二戸市となり、町役場が空いた。この町役場はカラマツ材を多く使い、地元特産の漆を内装に使うなど環境に配慮した評判の建物らしい。

今東光は、昭和五十一年に浄法寺町天台寺の第七十一世住職だった。瀬戸内寂聴は昭和六十二年に第七十三世住職だった。そのような縁があつて記念館に寄贈される運びとなったのだらうけれど、今東光とのゆかりの地は、平泉の中尊寺や大阪の八尾、そして佐倉がある。遺品の二戸市行きは、いささか気になる話なのである。

甥御さんのお嫁さんであるつる子さんは、一人暮らしのきよさんを支えてお世話をなされていた。そのつる子さんの話では、今東光の品々が予想以上に大量なので二戸市は搬送にも収納にも予算が立たず、今まだ実現していませんとのことだ。リビングにあつた大きな絵画、ロゼッティともう一つは、西洋美術館に保管してもらっているとのこと。

佐倉に今まだそのままにある蔵書やゆかりの

品々は、これからのようになっていくのだろうか。佐倉にも少し残しておいてくださいね、研究者がうかがった時には、資料を見せてあげてくださいと、いつもと同じお願いをして帰って来た。

『乙女の港』について

中嶋展子

『乙女の港』は、昭和十二年六月号から昭和十三年三月号までの十回、「少女の友」に発表された少女小説です。

昨年、『少女の友』創刊100周年記念号 明治・大正・昭和ベストセレクション（平成21・3 実業之日本社）に「乙女の港」の第一回が掲載され、『乙女の港』（平成21・12 実業之日本社）では、単行本『乙女の港』（昭和13・4 実業之日本社）を原本としたものと『川端康成全集 第二十巻』（昭和56・新潮社）を底本にした二冊組が出されるなど脚光をあびている。

一方でこの作品は、中里恒子の原作であったと「朝日新聞」（平成元・5・19夕刊）に報じられた経緯がある。

新聞記事には、神奈川近代文学館の職員が調査

したところ、「乙女の港」の「二十枚ほどの草稿を発見した」と記されている。『乙女の港』の原作者である中里恒子と、その執筆者である川端の關係については、次のような見解が述べられている。川端が主婦作家であった中里の才能を「早くから認め、助言をしたり、直接指導」をしており『乙女の港』もまた、中里が「全幅の信頼を川端に寄せて」下書きをしていたことが書簡からうかがわれ、川端が「執筆指導」も兼ねて中里に原作を依頼していた、とある。

平成十八年の春、中里恒子草稿を閲覧するため神奈川近代文学館に足を運んだ。それから数年後、川端の少女小説に興味を持ち中里恒子の草稿と『乙女の港』の比較からも、川端の執筆指導の跡を辿りたいと考えるようになった。

中里恒子の草稿は、川端の『乙女の港』「七新しい家」（『少女の友』昭和12・12）にあたっている。お姉さまと慕う洋子と三千子の仲を裂こうとする克子、三人の女学生の心模様を描かれた回である。「七新しい家」と中里恒子草稿を追っていくことで、次のことが判った。

●一回の連載ごとに山場を作り、小題に合うような結末を描くという、小説の息づかいが伝えられている。

●場面の細部まで書きこんだ文章表現にな

っている。
●「魔法」と「愛」という言葉が意図的に用いられている。

「小説の息づかいや文章表現」は、中里恒子に小説の書き方を伝えようとして改稿したものと考えられ、中里を小説家の先人として導こうとする川端の姿が、草稿の比較からも窺えるのである。そして、「魔法」は自己本位な恋の感情を描く時に用いられ、「愛」は同性愛的な友情から博愛の精神へと少女の気持の切り所が変化する『乙女の港』の結末に込められた愛のテーマと関わる言葉になっているのではないかと思う。

以上のことを、「川端康成『乙女の港』論―『魔法』から『愛』へ―中里恒子草稿との比較から」（岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要）第29号 平成22・3）にまとめたことお知らせいたします。

また、川端が「作者のことば」（『乙女の港』昭和27・11 ポプラ社）で、

わたしが少女のための小説を書くやうになつた第一歩の作品で、『乙女の港』よりもよい作品はなかなか出来ないやうです。

と自解しているところからも、川端の少女小説での同性愛的なテーマの完成が思われるのである。

- 斉藤美奈子 川端康成『伊豆の踊子』 名作うしろ読み
「読売新聞」夕刊 7月2日
- 大橋鎮子 人生の贈りもの 川端康成が寄稿、著名人が続々執筆
「朝日新聞」夕刊 8月24日

補遺

- 十重田裕一 「名作」はつくられる 川端康成とその作品
NHK カルチャーラジオ 文学の世界 日本放送出版協会 平成21年7月
- 第一回 日本地図のなかの近現代文学 川端康成の位置
第二回 職業作家の舞台裏 日記・書簡に見る文学者としての胎動期
第三回 耳で聞いてわかる文章 川端康成の「国語」観
第四回 「名作」化する「伊豆の踊子」 国民的小説へのプロセス
第五回 横光利一とともに 新感覚派時代からの軌跡
第六回 文学と映画の遭遇 映画「狂った一頁」とシナリオ
第七回 モダン都市・東京を描く「浅草紅団」の鼓動
第八回 パノラマと意識の流れ 「浅草紅団」「水晶幻想」などに見る言葉との格闘
第九回 「雪国」に見る陰翳の秘密 昭和十年、闇と光の想像力
第十回 芥川賞の第一回選考委員として 太宰治との応酬をめぐって
第十一回 占領下で紡がれる物語 「山の音」「千羽鶴」まで
第十二回 高度経済成長のなかのノスタルジア 文芸映画の時代
第十三回 世界のカワバタ 「古都」から「美しい日本の私」へ

- 下条正純 川端康成「乙女の港」の人物関係と女学生ことば 「表現研究」90 3月
- 佐藤幸子 川端康成と太宰治—芥川賞をめぐって
「郷土作家研究」(青森県郷土作家研究会)第34号 8月
- 藤田真一 川端康成の『蕪村文台』 「俳句研究」 夏
- 福田和也 第二章 川端康成 みずうみ
『大作家“ろくでなし列伝” 名作99篇で読む大人の痛みと欲び』
ワニブックス新書 発行ワニ・プラス 10月

……お知らせ……

* 会報の原稿を募集します。

川端康成に関するエッセイ、作品論、作家論。
自著紹介(川端以外も可)、今後の研究目標など。
また、川端周辺の作家や評論家に関する、エッセイや評論なども募集します。

** 川端に関する論文やエッセイなどお送りください。本誌の「川端康成 参考文献」に掲載させていただきます。

以上、編集(森 晴雄)宛に直接お送りください。

〒152-0001 目黒区中央町1-2-17

事務局 銀の鈴社内

〒248-0005

鎌倉市雪の下3-8-33

奥泉光・いとうせいこう 文芸漫談シーズン3 川端康成『伊豆の踊子』を読む
「すばる」

11月

3 単行本所収 論文・エッセイ・解説

石川則夫 文学言語の探求 記述行為論序説 笠間書院 平成22年2月

I 文学言語論の定位と展開 5 作品とは何か—川端康成「心中」研究の記述行為論

III 川端康成・生動する文学言語

12 川端文学の言語観—言語不信が要請する言語依存

13 「伊豆の踊子」その〈風景〉の発見と〈旅〉の造形—「山越えの間道」の調査から

14 「伊豆の踊子」の視角—〈旅〉が隠蔽する〈私〉

15 物語の失速／小説の挫折—「伊豆の踊子」再論

16 「掌の小説」その課題と展開—「お信地蔵」「神います」を事例として

17 「有難う」の省略

18 「男と女と荷車」論

19 「故園」の特質

20 〈体温〉を希求する「雪国」—溶解されるハーフミラー

石原千秋 淋しいフェティシズム 川端康成『片腕』

『あの作家の隠れた名作』PHP新書636

平成21年11月

鹿島茂解説 失われたSを求めて

内田静枝 解題 『乙女の港』と『少女の友』

川端康成『乙女の港』完本 実業之日本社

12月

*完全復刻版 旧かな *新装版 連載時の挿絵収録 新かな版

福田和也 第十一章 「自己犠牲」の高貴と妄想—『カラマーゾフの兄弟』ドストエフスキーと「弓浦市」川端康成

『最も危険な名作案内 あなたの成熟を問う34冊の嗜み』ワニブックス新書

12月

酒井明司 一、『雪国』(川端康成)—『雪国』の汽車は蒸気機関車だったか?

『雪国』の汽車は蒸気機関車だったか? 鉄道・文学・戦前の東京

東洋書店

12月

出口汪 第六章 川端康成「伊豆の踊子」

『教科書で教えてくれない日本の名作』ソフトバンク新書

12月

池内紀 川端康成と二人の青年 『文学フシギ帳—日本の文学百年を読む』岩波新書

平成22年7月

松原一枝 エレベーターで見送った川端康成

『文士の私生活 昭和文壇交友録』新潮新書

9月

小谷野敦 六 『事故のてんまつ』事件 一九七七

『現代文学論争』筑摩選書

10月

4 その他

西脇真一 舞踊家 崔承喜上、下 忘れ得ぬ人々 日韓併合100年 第2部

『毎日新聞』平成22年3月23、24日

中山理恵 エンドロール 「掌の小説」 プロジューサー・坪川拓史さん 20年の思い

桜に託す 「朝日新聞」

3月24日

田村嘉勝 二〇〇九・八・二九—第一回横光利一文学会・川端文学研究会コラボの意義

『昭和文学研究』第60集 昭和文学会

・3月

岡本かの子から川端康成へ 未公開書簡60通 川端邸で発見

『読売新聞』朝刊

4月9日

森 晴雄 編

1 特集

- 横光利一と川端康成 「解釈と鑑賞」平成 22 年 6 月
- 羽鳥徹哉 横光・川端の今日的意義
- 福田淳子 川端康成における文学活動始動期の考察 菊池寛との関係から
- 片山倫太郎 若き日の川端における思想関連文献の受容の脈絡を探る
雑誌「変態心理」を起点として
- 森晴雄 川端康成『第一短篇集』 「月」を中心に
- 原善 川端が失恋を物語る中で描いたもの 「南方の火」を中心に
- 吉田秀樹 「浅草紅団」のはぐらかし 流動する街を捉える手法
- 田村充正 「水晶幻想」論
- 山田吉郎 川端康成『虹』と無償の美の系譜 横光利一『紋章』に触れて
- 平山三男 横光と川端 「雪国」と、その書かれた時代
- 田村嘉勝 「再会」 自身との、<再会>と新たな決意

2 雑誌……論文・評論・エッセイ

- 森本穂 魔界の住人 川端康成—その生涯と文学 「文芸日女道」498～510
平成 21 年 11 月～22 年 11 月
- 野口裕子 「川端康成『古都』におけるすみれの花と時間感覚
「京都府立大学学術報告」61 12 月
- 川勝麻里 川端康成「コスモスの友」は中里恒子代作か
—川端『純粹の声』の感想文草稿を手掛かりに—
「明海大学教養論文集 自然と文化」20 12 月
- 金森範子 ロダンの《女の手》 「小品」第二十九集 12 月
- 井上二葉 川端康成『秋の雨』と音楽 「群系」第 24 号 12 月
「人文学会誌」第十一号 宮城学院女子大学院 平成 22 年 3 月
- 森 晴雄 川端康成「バツタと鈴虫」—「一つの童話」 「雲」1 月～4 月
「化粧の天使達」……「色彩」「寝顔」「花」「風景」「葉」
「裾」「白髪」 「雲」5 月～11 月
「白粉とガソリン」—踊子・小娘・少年
「芸術至上主義文芸」36 11 月
- 小基裕二 川端康成「化粧」の構造分析 「上越教育大学研究紀要」29 2 月
- 川上真人 赫奕たる異端—中河與一論— 疎外とモダニズム—「文芸時代」以後の文学的
アプローチ……川端康成「伊豆の踊子」／中河與一「心の影」
「とどろき教育」第 32 号 千葉経済大学附属高等学校 2 月
- 中嶋展子 川端康成『乙女の港』論—「魔法」から「愛」へ・中里恒子草稿との比較から—
「岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要」29 3 月
川端康成と少女の文集—西村アヤ・石丸夏子・山川弥千枝
「芸術至上主義文芸」36 11 月
- 毛利優花 同性愛的な憧憬—川端康成 住吉連作論
「金城学院大学大学院文学研究科論集」16 3 月
- 曾根博義 「犬も歩けば 近代文学資料探索 (3) 川端康成『純粹の声』
「日本古書通信」 3 月
- 森本穂 戦時下の川端康成と古典 「文芸日女道」502 3 月
- 羽鳥徹哉 終わりを読む—「雪国」 「解釈と鑑賞」 9 月